

保育の現場から

安心・安定する

— A男の「走る」ことをとおして —

高橋陽子

七月になると保育者は、そろそろ夏休みということに気持ちが向いていきます。子どもも五歳児ともなると、二回目、三回目の幼稚園での七月ということとで、保育者同様「夏休み」を身近に感じ始めるように思います。夏休みの予定を家族で話したり、さらには学年の友だちと「ヤッホッホ夏休み」(作詞・伊藤アキラ 作曲・小林亜星)を歌ったりすることによって、今までの夏休みの体験を思い出し、これからくる夏休みを、ますます楽しみに待つようです。ところが、四月に入園したばかりの三歳児にとつ

ての七月は、自分のクラスが自分の場所となり、保育者や友だちと過ごす楽しさを知り、幼稚園の生活の流れを感じて、ようやく安心して暮らせる場所となってきたところです。中には「土日もなぜ休みなの？」と聞いて、親を困らせるほど幼稚園に親しみ始める時期ですから、まして長い休みになるとは思ってもみないことのようなのです。

幼稚園が、そのように安心して暮らせる場所となるための道筋は、二十人いれば二十通りあるように思います。「安心」「安定」といった言葉でとらえられ

る幾つかのエピソードを追ってみたいと思います。

A男は入園してから毎日園庭を走っていました。

朝のしたくが終わると、まず保育室で木製汽車で遊び、その後園庭に出て、自分が電車になりアナウンズしながら走るのです。外に出るときに「先生も乗ってください」と言うので、行くことができます。ときには一緒に外に出てA男の後ろについて走り、その後ろを、私を頼りにしていたB子やC男がついて走るといふ姿が、毎日見られました。

もちろんいつもすぐに外に出られるわけではありません。そのときにはA男は、私の方をチラチラ見ながら、いすを倒したりブロックを投げたりして、気持ちを表していました。すぐに行くことができない理由を伝え「それはしないでね」と言っただけで体を止めようとしても、身をかまし体をこわばらせて私をじっと見ています。しばらくして「お待たせしまし

た。電車に乗せてくださいね」と私が言うと、A男の体が張り切りだします。そして、A男はお山と園庭をぐるっと一周走ることを何回も何回も続けます。A男は走るのがとても速く、二周もすれば私はかなり疲れてしまいます。またB子はそのスピードについてくることができず、泣きながら「待って」と叫びます。A男についていきたい、でもB子も不安にしたくない、そんな思いで私は走っていました。

C男はまだまだ元気があり、客として後ろについて走っているというよりも、いつのまにか自分も運転手になって走り続けています。保育室で待ちきれずにいすを倒したり物を投げてしまったりするA男と私のやりとりを見ていて、その後の私たちのやることも見て、一緒に動き出す子どももいました。

走るきっかけや走りながら思っていることは子どもによって違うと思いますが、たくさん走り、園庭のいろいろな場所を通り、「もうお帰りですね」と

同じ保育室に戻っていくことで、それぞれの子どもたちに「幼稚園って、気持ちいいな」と感じてほしいと願ひ、私も毎日走り続けました。

六月になるとA男は「先生、何時何分出発ですか?」と聞いてから、園庭に出かけるようになりました。「先生まだですか?」と時どき保育室をのぞきに來ましたが、すぐに行くことができなくても一人で走ったり砂場で遊んだりしていました。そして、私がほかの子どもたちとおいかげごっこや虫捕りをしていると近くに來て、そこで一緒に過ごすこともありました。

B子は、登園して朝のしたくを済ませると画用紙に人形の顔を描くことが日課でした。一枚描き終わると、私のそばに來て一緒に過ごしました。五月に入ってからでしょうか、画用紙と同じ絵を描くことがなくなり、友だちのやっていることをじっと見た

り、アリを捕まえたり、砂場で遊んだりするようになっていきました。

アリは、砂場の周りにたくさんいました。五月の初めころから、たくさんの子どもたちがアリを捕まえてはビニール袋や虫かごに入れるようになっていました。五月中旬ごろ、昨年までこのあたりで過ごしていた四歳児が虫かごやバケツに入ったダンゴムシを見せに現れるようになりました。その虫かごの中には歩く姿も丸まった姿も魅力的なダンゴムシが何匹もいて、三歳児はアリではなくダンゴムシが欲



しいという気持ちに変わっていったようでした。四歳児は「お山に行くとかくさんいるよ」と教えてくれました。

私は、できることならその場にいるすべての子どもにダンゴムシを持たせてあげたいなと願っていましたが、最初は落ち葉をよけてじっと目を凝らしても一、二匹しか見つからない日々が続きました。しかし何日も続けていると子どもの方が見つけるのがうまくなりました。そして「あつ、いた」という声が聞こえるとわれ先にとそちらに出かけ、子どもたちも自分で必死に探すようになっていきました。

C男も、ダンゴムシに魅力を感じた一人でした。A男について保育者と一緒に走ることはありませんでしたが、誘っても保育室内に残って寝そべっていたり、ウレタン積み木で場所をつくってその中にい続けたりしていました。しかし友だちが山から取ってきたダンゴムシを見て関心をもち、保育者と一緒に外に

出たときには、ダンゴムシを捕まえてから戻るという日もありました。

六月の終わりのこと。C男が「誰か、だんごちゃんを捕まえに行きませんか」と靴を履き替えてから保育室内に向かつて言ったのです。C男が「だんごちゃん」と呼んでいたことはクラスの子どもたちは知っていましたが、その行動に驚いたのか子どもたちは一瞬静まり返りました。私はC男の行動を後押ししたいと思い、虫好きの男児二人に声をかけてみました。すると、その二人もすつと外に出て三人でお山に向かいました。そしてその日から、いつも三人で連れ立ってお山に行くようになりました。

「そこにはもういないよ」「そんなにたくさんいるならちようだい」などと話しながら、いろいろな子どもたちが交じってダンゴムシ捕りに熱中していました。そして、朝から帰りまでずっとダンゴムシを探しているわけではなく、山小屋に登ったり大銀杏

を見上げたり、かくれんぼをしたりそれぞれによい時間を過ごしていたようです。

ころ合いを見て片づけの時間を伝えるに行くと「あと一匹捕まえたらね」と口をそろえて言う子どもたち。同じものを持ち同じことをして、同じ空気を感じて、同じことを言っていて、そしてみんな戻ってくる姿を見て、友だちと一緒に楽しいということ。この時期にこれだけ経験している子どもたちに、担任としてうれしさを感じたものでした。

走り抜ける場所であり、保育者と一緒に過ごす空間だったお山が、ダンゴムシ捕りをきっかけに子どもたち同士で同じ目的をもつて出かける場所に変わっていききました。

ダンゴムシがきっかけでお山が自分たちの場所になっていった子どもたちにとっては、だんだんと自分の生活する空間が広がっていく、すなわち安心して過ごせる場所が広がっていったような一学期の終

わりだったように思います。しかし中には、入園間もない時期から園庭の奥まで出かけ、帰る時間まで戻ってこない子どももいました。

入園式の翌日から、私たちの幼稚園では子どもたちが自分のやりたいことをできるように支えています。時には教師が子どもを誘って、一緒に砂場で遊んだりチャボを見に行くこともしていました。そういう中で、砂場で座り込んで黙々とシャベルで砂をすくってはカップに入れたりこぼしたりを繰り返す子どもや、「プリンです」と私に渡して誘う子どもなど、それぞれの過ごし方をしていました。

三歳児の砂場は園庭の端にあるので、そこから園庭を見渡すことができ、年長児が遊ぶ様子がよくわかります。心細く感じている子どもはじっと砂場から離れることはできないのですが、D男やE男は思ったら行動するタイプで、早いうちから向こう端

にあるジャングルジムで遊ぶなど、いろいろな場所に出かけていました。

五月の中旬ころ、D男やE男がブロックで作った武器を持ってたたかい系のごっこ遊びをする姿が見られるようになったので、広告紙で剣を作ることを提案してみました。すると、作った剣は毎日持ち帰り、翌日登園後すぐに「剣作って」と言うようになりました。保育室がスタートの場所として位置づき、ほかの友だちがどんなことをしているかに触れることとなりました。またほかの友だちもD男とE男の遊びに関心をもち、剣を作ったり一緒にたたかうポーズを取ったりするようになりました。そしてD男やE男は剣を自分流に作り変えたり自分で丸めたりしてから外に出かけ、剣が壊れた、転んだなど困ったことが起こったり、園庭で何かを発見したりすると保育室に戻ってくるようになりました。保育室や担任である私が安心できる場所となったことを感じま

した。

安心できる場所や物が見つかるように、また、同じ保育室でいろいろな人と一緒に暮らしていることが心地よいと思えるようにと、私は入園以来願って過ごしてきました。そしてしっかりと一人ひとりの子どもの心に根づいていることが実感できた七月でした。

その後も私は毎日走り続けました。いろいろありましたが、三学期になってA男はC男、D男、E男たちと一緒に「パトロール」と言いながら毎日園庭を駆け回っています。A男は白い紙を丸めた棒を持ち、C男は何も持たず、そのほかの子どもたちは広告紙の武器を持って。時どき「ショー」を見せたり砂場で工事の人になったり、それぞれが違う場所で違う友だちと一緒に遊んだりしながら、一日を充分に過ごしてみんなが保育室に戻ってきています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)